ṣaḍaṅga-yoga をめぐつて

磯　田　熙　文

一

『Hevajra tantra』I-viii,「Yoginī-cakra-paṭala」の 22～25a, b には，“六色（黒・赤・黄・緑・青黒・白）の修習”と“離歓喜の辺際（俱生歓喜）の修習”が説かれる。

『Hevajra tantra』の注釈書のうちで，Vajragarbha に帰せられる『Piṇḍārthaṭīkā』は，前者が生起次第の六支，後者が究竟次第の六支（pratyāhāra 等の ṣaḍaṅga-yoga（六支瑜伽）――『Guhyasamājottara (GSU)』からの引用）に対応させ，「詳しくは，『Paramādibuddha』（東北（D）No. 362, 北京（P）No. 4）にて理解すべし」と付説している。更に，Sñan-grags bzaṅ-po (or Nāro-pa) の作と伝えられている『Vajrapādasāra-Saṃgraha (VS)』(D. No. 1186, P. No. 2316) においても，同類の注解がみられる。

ここに pratyāhāra 等の六支を引く解釈は，他の注釈書にはみられない[1]。

Vajragarbha では，上引の注解以外に何らの説明もないが，『VS』は多少の解説を加えている。そこで，今は，この解説を手がかりにして，六支瑜伽を述べる他の文献との関連を探り，それらの著作者等を考察する際の一助としたい。

二

『VS』は，次の様に注解する[2]:

「今や，“六支瑜伽……”（という『Hevajra. tantra』本偈に関して）この意味は次の様である。タントラは他のタントラにより理解されるべきであるということが，如来の定めるところ（tathāgata-niyama）である。従つて，他のタントラに説かれているところによって，この六支瑜伽も修習さるべきである。（『GSU』に）

pratyāhāra, dhyāna, prāṇāyāma, 同じく，dhāraṇā, anusmṛti, samādhi, 以上が六支といわれる。

---

1) これらについては，「Hevajra-tantra における samādhi について」（日仏年報 41 号 21 頁）に触れた。

2) D. No. 1186, fols. 103b^{2}–104a^{7}, P. No. 2316, fols. 120b^{1}–121b^{1}。

（と説かれているが）ここで，

1. pratyāhāra とは，外的な色等の諸対象に眼等の諸根によつて眼識等が働かずに，内的の諸対象に天眼等の諸根によつて天眼識等が働くことであつて，内空を縁じて，無分別にすべての存在を見る，丁度，（占いの）ありのままに映す鏡の中に，娘が姿を見る様に[3] である，（これが）pratyāhārâṅga であるといわれ，三界の仏の姿をそれぞれ見るからである。

次に，2. dhyāna とは，すべての法を空であると見る場合に，（i）般若（prajñā）: 最初にそれら（諸法）に心が働く，（ii）尋（vitarka）: 心が（それらを）存在するものとして把握する，（iii）伺（vicāra）: その存在の把握を証知する，（iv）歓喜（rati）: すべての存在に心が住する（āropaṇa）:（v）不動の楽（acala-sukha）: すべての存在から楽をこよなく味わう，以上の五種[4] が，dhyānāṅga といわれる。

次に，3. prāṇāyāma とは，lalanā と rasanā 即ち左右の道を遮蔽して，中央の avadhūti の道に生命風が常に流れることであつて，pūraka（吸息）・kumbhaka（止息）・recaka（出息）の yoga によつて行なわれる，（これが）prāṇāyāmāṅga といわれる。

次に，4. dhāraṇā とは，気息が，臍・胸・首・額の，mahendra（地）・水・火・風のマンダラに入り，外には出さない，そして，bindu に気息を入れる，（以上が）dhāraṇāṅga といわれる。

次に，5. anusmṛti とは，自己の守護神（sveṣṭadevatā）を見て，その色像の姿に対する分別を離れ，それから多数の光線が輝き放たれる形の光輝マンダダラと，それから多くの輝き出る形相をもつた三界を現出する，（以上が）anusmṛtyaṅga といわれる。

次に，6. samādhi とは，自己の守護神に対する随貪から，不滅の楽を獲得するが，それに心を一項に（集中）し，所取と能取を離れた（その）心が，諸如来によつて，samādhyaṅga であると説かれた。

ここでは，六支瑜伽が要約して説かれたのであつて，詳しくは，『Lakṣaṇābhidhāna』あるいは『Paramādibuddha』に対する勝れた師（guru）の教授に基いて，

3) "pra-phab-pa na gshon-nu-mas me-loṅ la mthon-ba Ita-bu"。この比喩は，『Sekoddeśa』にみられるが，その注解『SUṬ』によれば，"pratisenādarśana-kumārikāyateva" (M. E. Carelli ed. G. O. S. XC. p. 38, *l.* 21)。

4) 『GSU』(B. Bhattācharya 本 p. I63; &. Bagchi 本 p. 132; Y. Matsunaga 本 p. 123) では，"vitarka, vicāra, prīti, sukha, cittasyaikāgratā" である。ここでは，最初に prajñā を加えて，sukhacittaikāgratā (=samādhi) としている。

瑜伽者達は，大印悉地のために証得すべきである，と。

『Śrī Ādibuddha』に，また，説かれる[5]:

瑜伽者は，pratyāhāra によつて対象を離れ，すべてのマントラによつて加持される。五神通を獲得する。人主（narapati）よ，dhyāna-yoga によつて，清浄である。prāṇāyāma によつて清浄であり，月と太陽を離れており，諸菩薩の供養するところである。dhāraṇā の力によつて，魔と煩悩等を滅する十力に恵まれる。anusmṛti によつて，充分に清浄となろう，そして，智慧の色像（jñāna-bimba）から無垢の光のマンダラが（生ずる）。それから，智者は，三昧において，数日のうちに，智身を成就する，と。」

以上が，六支瑜伽について，『VS』にみられる注解の全文である。

ところで，上述の六支瑜伽の各支の説明は，ほとんど同文で，これも Nāro-pa の作と伝えられる『Sekoddeśa-ṭīkā（SUṬ）』(D. No. 1351, P. No. 2068) に見られる[6]。唯，第三支 prāṇāyāma の pūraka 等の 3 yoya に関して，「瑜伽者は，Oṃ をもつて pūraka, Hūṃ をもつて kumbhaka, A をもつて recaka を，それぞれ，candra, rāhu, sūrya を自性として行う」という説明を加えていることと，『SUṬ』は，この説明を，聖 Vajrapāṇi pāda（の『Ṣaḍ-aṅga-yoga（V-Ṣaḍ）』(D. No. 1364, P. No. 2080)）からの引用であると述べている点が異なる。

『SUṬ』は，六支瑜伽について，先ず『GSU』のそれを，略説（uddeśa）と詳説（nirdeśa）と更に詳しい説明（pratinirdeśa）とによつて述べているが，その際に，六支とその果の注解の間に，「六支瑜伽は，『Kālacakrottara（-tantra-hṛdaya）』(D. No. 363, P. No. 5) に，Mañjuśrī-pāda によつて，非常に明らかに説かれている」[7] として，本偈を引用する。

そして更に，「（六支瑜伽は）『Śrī Kālacakra』にも説かれ，また『Vimalaprabhā』にも詳しく解説されている，即ち……」として，『Kālacakra tantra』の本

---

5) pratyāhāreṇa yogī viṣayavirahito 'dhiṣṭhyate sarva-mantraiḥ.
pañcābhijñānalābhī bhavati narapate dhyānayogena śuddhaḥ/
prāṇāyāmena śuddhaḥ śaśiraviravirahitaḥ pūjyate bodhisattvair.
mārakleśādonāśaṃ viśati daśabalaṃdhāraṇāyā balena// 118//
saṃśuddho'nusmṛteḥ syādvimalamanasi bhāmaṇḍalaṃ jñānavimbāt
tasmād buddhaḥ samādhau katipayadivasaiḥ sidhyate jñānadehaḥ/
(Raghuvira & L. Chandra ed.; Kālacakra-tantra and other texts pt. I, p. 361).

6) M. E. Carelli, p. 38, *l.* 17～p. 39, *l.* 7。D. fol. P. fol. $294a^6$–$295a_1$。

7) 酒井教授「チベット密教教理の研究(一)」附録—後期密教実践次第の構造について，13–22 頁参照。

偈を引きつつ，また適宜『Vimala-prabhā』を引用しつつ解説している。そして，そこに述べられる注釈文の大部分は，更に，Anupamarakṣita の『Ṣaḍaṅga-yoga (Anu-Ṣaḍ)』(D. No. 1387, P. No. 2102) の中に，ほとんど一致する字句で見出される。しかし，上述の六支瑜伽の説明を，『Anu-Ṣaḍ』は，『V-Ṣaḍ』からの引用とは述べていないことや，文脈の順序などの点で異なつている[8)]。

一方，『VS』の各支の説明も，『V-Ṣaḍ』から，と断わつていないからといつて，『Anu-Ṣaḍ』からの引用であるとも決められない，何故なら，次に引く例の様に，Vajrapāṇi 曰く，として，『V-Ṣaḍ』を引用しているからである。即ち，『Hevajra tantra』II-ii-9 に[9)]，

すべての思念を捨て，神の姿を心に描いて，一日，不断に修習しつゝ，観察すべし，

と説かれるが，『VS』は，「この（偈の）意味は，次の如し」と述べて，『Śrī Ādibuddha』(IV-228)[10)]を引き，[11)]「タントラは他のタントラによつて理解さるべきであるとは，如来の定説である。吉祥 Vajrapāṇi も次の様に説かれる」として，『V-Ṣaḍ』,『Anu-Ṣaḍ』,『SUṬ』に共通に見られる一文を引く；

「こゝで，世尊の誓（pratijñā）は，

一切の思念を断じて，一日，観察せん。もし信を生じなければ，その時には私は妄語を吐いたことになる，と（いわれる）。

ここで，信とは，煙等の相である，他のマントラ等をもつては，一日で成就せられることはない，マントラを誦する者達にとつてはそれが信となる（のだが）。だから，存在と非存在との覚（buddhi）を捨てて，無依止のものとなつて，空において甚深なる無所得を修する，即ち信を生ずるのである。その信は，また煙等の相として，瑜伽者により修せられる，（といわれるの）が，如来の定説である。同様に，

結縛の加行の諸作具によつて，三世界を成就すべし，

といわれ，眼等の諸作具によつて，仏の色像・三世界を成就すべきで，まさにその教示は師（guru）のお口より理解すべきである」ここまでが引用され，更に，

---

8) 即ち，『SUṬ』の，例えば「六支瑜伽の果について」といつた，まとまつた一区切りの説明を，A, B, C の順で表わすと，『Anu-Ṣaḍ』では，—F,…（不対応部分）A—B—G—C—H…D…E—の如くの順序で述べられている。

9) D. L. Snellgrove, The Hevajna Tantra pt. 2, p. 46。

10) Raghuvira and Lokesh Chandra, op. cit. p. 366, 259～10。

11) 以下，D. fol. 121a^{5}b^1, P. fol. 140a^5–b^2。

『Ḍākiṇīvajra-pañjala』,『Paramādibuddha 一万二千』[12]などからの引用文が続く。

ところで，この『VS』の大きな特色の一つとして付け加えておくべきことは，他の注釈書に比して非常に多くのタントラ，経等を引用していることである。即ち，「タントラは他のタントラによつて……」の一文[13]を実際に例示しているわけであるが，具体的に題名を挙げているものだけでも，50余種にのぼり，殊に，『Kālacakratantra (Ādibuddha)』と『Prajñāpāramitā』の顕揚が目立つ。引用文の中に引用される場合もあるが，見出される題名のうち，引用文の中に引用されるものもあわせて，その回数の多いものを挙げてみると；

1.『Daṅ-poḥi saṅs-rgyas』(D. No. 362, P. No. 4) 44回. 2.『Mtshan yaṅ-dag-par (b)rjod-pa』(D. No. 360, P. No. 2) 34回. 3.『Śes-rab kyi pha-rol-tu phyin-pa』32回[14]. 4.『Dri-ma daṅ bral-baḥi (or med paḥi) ḥod』(D. No. 845, P. No. 2064) 23回. 5.『Sampuṭa』(D. No. 381, P. No. 26) 14回. 6.『Ḥdus-pa』,『Ḥdus-pa phyi-ma』(D. No. 442, P. No. 81) 14回. 7.『Rdo-rje rtse-ma』(D. No. 480, P. No. 113) 13回. 8.『Mkhaḥ-ḥgro-mo rdo-rje gur』(D. No. 419, P. No. 11) 8回. 9.『Saṅs-rgyas thams-cad mñam-par sbyor-ba mkhaḥ-rgro-ma dra-baḥi sdom-pa』(D. No. 366, P. No. 8) 6回. 10.『Dgoṅs-pa luṅ-ston-pa』(D. No. 444, P. No. 83) 6回. 11.『Gdan bshi-pa』(D. No. 428, P. No. 68) 5回. 12.『Thams-cad mkhyen-pa rdo-rje ḥjigs byed』(?) 4回. 13.『Rdo-rje bdud-rtsi』(D. No. 435, P. No. 74) 4回. 14.『Thams-cad gsaṅ-ba』(D. No. 481, P. No. 114) 4回. 等[15]である。

さて，『Deb-ther sṅon-po』は，「Ācārya Anupamarakṣitaは，Acārya Nāro-pa より後ではありえない，何故なら Nāro-pa が，『Sekoddeśa-ṭīkā』に彼 (Anupama) の教説を引用しているからである」[16]と述べている。しかし，『VS』にせよ，『SUṬ』にせよ，Nāro-pa の著作性が疑わしいとされている[17]限り，これを典拠として，Nāro-pa と Anupamarakṣita の先後を定めることは控えなければならな

12)『Dpal mchog gi daṅ-poḥi saṅs-rgyas stoṅ-phag bcu-gnis-pa』即ち根本タントラからの引用とするが，この偈は，『Sekoddeśa』(D. No. 361, P. No. 3) D. fol. 15a[3-5], P. fol. 17a[4-8] に見られる。

13) この慣用的に用いられる一文は，『VS』等，ここに取上げた文献に特徴的に共通に見られるが，『Vimalaprabhā』に典拠を求めうる。cf. 東北蔵外 No. 5006 (B): Lokesh Chandra ed., The Collected Works of Bu-ston, fol. 370[2-3]。

14) 章名，章数を付した引用文 (23) から，『八千頌般若』(D. No. 12, P. No. 734) からの引用であることを確かめうる。

い。

以上，見てきたところから，いずれが，いずれの引用かということは別にして，この六支瑜伽の説明を通して，『VS』，『SUṬ』，『Anu-Ṣaḍ』，『V-Ṣaḍ』に密接な関連のあることが判る。

三

次に，これらのうちの，『Anu-Ṣaḍ』と『V-Ṣaḍ』について比較してみたい。

『V-Ṣaḍ』の post-colophon には，[18]「秘密主・十地の自在者・菩薩 Vajrapāṇi の造られた『Ṣaḍaṅga-yoya』という書が完結した」とあるのみで，著者についての他の具体的な手がかりはない。

本文は，「秘密主 Vajrapāṇi に帰命す」という帰敬句で始まるが，すぐに引続いて，次の様に述べる[19]；

「この場合に，方便は六支瑜伽であつて，こゝでは，中間の支の順序が逆になつており，各々の中間の支（pratyāhāra. と prāṇāyāma と anusmṛti）が除かれているが，こ

15）その他，『大日経』，『Rdo-rje mkhaḥ-ḥgro』，『Gsaṅ-baḥi dbaṅ-poḥí nor-buḥi thig-le』，『Mṅon-par brjod-pa phyi-ma』（『mṅon-par brjod-pa ḥbum-pa』），『A-ra-lliḥi rgyud chen-po』，『He-ru-ka mṅon-par ḥbyuṅ-ba』，『Don dam-paḥi bsñen-pa』『Bde-ba dam-pa rtogs-par byed-paḥi rgyud chen-po』，『Rdo-rje gsaṅ-baḥi rgyud』，『Nam-mkhaḥ mñam-paḥi rgyud』，『Rdo-rje phreṅ-baḥi rgyud』，『Rdo-rje sñiṅ-poḥi rgyan』，『Gñis-sumed-pa mñam-pa rnam-par rgyal ba rnal-ḥbyor chen poḥi rgyud』，『Gsaṅ-sṅags tshul chen』，『Saṅs-rgyas mtshan-gyi rgyud』，『Dam-tshig gsum gyi rgyud』，『Lha-mo bshis shu-ba』，『Gsaṅ-baḥi rgyan bkod-pa』，『Bde-chen-po rtog-paḥi rgyud. chen-po』，『Sgyu-machen-poḥi rgyud』『Ḥkhor-lo sdom-pa』，『Bdud-rtsi ḥkhyil-pa bzlas-paḥi bum-pa』，『Ye-śes rdo-rje kun-las btus-pa rnal-ḥbyor chen-poḥi rgyud』，『Bde-mchog gi rgy-ud』，『Ḥjig-rten gsum gsaṅ-baḥi rgyud』。経関係では，『般若経』の他に，『楞伽経』，『大般涅槃経』，『文殊般若』，『大方広善巧方便経』，『普賢行願讃』の引用がみられる。また，人名では，Vajrapāṇi (I-viii, I-xi, II-i, II-ii)，Śāntideva (I-iv,『Bodhicaryā-vatāra』I-7 の引用)，Tog-tse-paḥi shabs(?) (I-iv)，Indrabhūti (I-iv)，Anaṅga-pāda (I-iv)，Mgon-pobyams-pa (I-iv)，Ḍoṃbī-pāda (II-ii)，Saroruhavajra-pāda (II-v,『Hevajra-bhaṭṭāraka-stotra』D. No. 1225, P. No. 2354 の引用)，Padma-pāda (II-xi) が引用されている。

16）Dr. Roerich tr., Blue Annals II, p. 769。

17）羽田野先生，「時輪タントラ成立に関する基本的課題」（密教文化，8, 37 頁），同，Kāśmīra-mahāpaṇḍita. "Śākyaśrībhadra."（文化，21–5, 664, 662 頁）。

18）D. fol, 187a^{7}-b^{1}, P. fol. 206b$^{5-6}$。

19）D. fol. 183b^{3}–184a^{5}, P. fols. 202a^{9}–203a^{2}。

ゝに説かれていない前にくる支を，説かれている後の支によつて理解すべきである，例えば，これは昼に行うといえば，他は夜に行うことが，いわれなくても，（その言葉から）自ずと理解される様にである。同様に，相互に観待する法は，未説のものでも已説の法によつて理解される。だから，このタントラ（『Kālacakra』）においても，各支の中に含まれる三支が説かれている。中間に説かれる（dhyāna）支を最初にするのは，師（guru）の教誡である。〔そうでない場合には，タントラに説かれる順序によつて把握する時には，その時にはある師の教誡が必要である。従つて，Sandhābhāṣā 等の〕[20]すべては，師の教誡に基いて知るべきである，あるいは，諸菩薩の造られた注釈より知らるべきであつて[21]，博学の慢心を持つ者達の造つたものに依つてではない。

次に，“dhyāna” 等によつて，別の三支が知られる。他のタントラ（『GSU』）に説かれる六支を，ここでは要略した意味によつて，三支として理解すべきである。（次いで『GSU』の六支を説く偈を引用してから）それ故，静慮（dhyāna）の前に pratyāhāra があると知るべし。マントラ読誦（mantrajāpa）の前に prāṇāyāma があると知るべし。この場合，マントラ読誦の句は，napuṃsaka-jāpa あるいは vajrajāpa を（指し），生命風の把持といわれる。

この様に，これら六支瑜伽こそは，仏果を成就する。共の外的な世間の瑜伽は，初業凡夫の瑜伽者達によつて，マントラ読誦と静慮とをもつて成就される。マンダラ輪を思念する修習心と楽は，羯磨印（karma-mudrā）と智印（jñāna-mudrā）より生ずる世間的の楽で，下降の楽たる世間の楽として，Akaniṣṭa 天宮に至るまでの世間の果である。以上，二次第によつて，世間と出世間の瑜伽（yogitva）が成就する。

次に，出世間の瑜伽の成就は，最勝の六支瑜伽によつてある，それについて説く，」として，先に引いた六支瑜伽の各支の説明に入る。

この『Vṣaḍ』の文章は，最初が唐突である。これとほとんど同一の対応文を見出せる『Anu-ṣaḍ』では，その前に，次の様な一文が述べられている；（先ず，大印に関する教誡を，Paramādibuddha が説くものとして，『Sekoddeśa』から 11 偈を引用し，次いで）[22]「更にまた，仏果を成就する方便が説かれるべきであつて，（それが）“瑜伽（yogitva）は……” である。ここで，瑜伽は二種，即ち世間と出世間のそれである。それから，出世間の瑜伽は，仏に外ならない。その区別は，“最勝の福徳” である，何故なら（仏は）福徳資糧を成満しているからである。この方便によつて，瑜伽者達は仏果を成就する，と（いうのが）Āgama の説くところである。」

20）〔　〕内は，『Anu-Ṣaḍ』にない。

21）Bu-ston は，これとほとんど同じ一文を，『Bde-mchog stod-ḥgrel』より引く（op. cit. p. 370, *ll.* 3–4）。

22）D. fol. 296a$^{2-3}$, P. fol. 333a^{6}-b^{1}。

次に，『V-Ṣaḍ』の書き出しの，「この方便は，六支瑜伽であつて」が続き，文脈がスムーズに結びつく。

ところで，『Anu-Ṣaḍ』の引く，“瑜伽は……”の引用偈は，ここには見られない。唯，Ravi-Śrījñāna に帰せられる『Guṇa-pūrṇi-nāma ṣaḍaṅga-yoga ṭippaṇī』は[23]，これを『Laghutantra』からの引用であるとして，

yogitvaṃ paramaṃ puṇyaṃ pavitraṃ pāpanāśaṃ/
rnal-ḥbyor-pa ñid bsod-nams mchog// dag-byed sdig-pa ḥjig-byed-pa/
sidhyate mantra-jāpena dhyānena ca sukhena ca//
/ sṅags bzlas-pa daṅ bsam-gtan daṅ/ / bde-ba yis kyaṅ ḥgrub-par ḥgyur//

を引く。しかし，『Laghu-kālacakra-tantra』は Sragdharā 調であり，この中に相当する偈は見出せない。

そして，『V-Ṣaḍ』の最後は[24]，

「以上の様に，六支瑜伽，（即ち）マントラ読誦と静慮と乗とによつて，瑜伽者はまさに仏果（を成就する）。最勝の福徳を積み，罪障を滅し，まさにこの生において成就する，という所成就と能成就との定めが，世尊によつて説かれた」

と結んでいる。

従つて，マントラ読誦・静慮・楽と六支瑜伽との結び付きを主題とした一篇であることがわかるが，以上見て来たところから，『V-Ṣaḍ』は．『Anu-Ṣaḍ』から別出して一篇としたものであろうと想定しうる。

一方，『SUṬ』も，『V-Ṣaḍ』からの引用として，六支瑜伽の略説を引いていることは先に述べたが，そこでは，『Anu-Ṣaḍ』，『V-Ṣaḍ』に見られる上述の導入部分，即ちマントラ読誦等の三支に触れる部分を欠いている。それは，『V-Ṣaḍ』の結びに対応する個所でも同様である。即ち，この三支に関わる部分・語句が除かれている。

四

これまで比較考察して来たところから，『VS』，『SUṬ』，『V-Ṣaḍ』，『Anu-Ṣaḍ』のうちで，前三者はこの『Anu-Ṣaḍ』を中心にして，その周辺，即ち同時代か後の著作ではないかと考えられる。

---

23) G. Grönbold, Ṣaḍ-Aṅga-Yoga, S. 45。D. No. 1388, fol. 322b[1]., P, No. 2103, fol. 364a[6]。

24) D. fol. 187a[6-7], P. fol. 206b[4-5]。

しかし，この Anupamarakṣita の生存・活躍年代については，明確にされていない。Raviśrī の註解の序文に[25]，

「私は吉祥 Kālacakra・自在者と，有徳の師（guru）達に敬礼し，それから，吉祥なる六支瑜伽に関して，徳に充ちた注解（guṇa-bharaṇī ṭippaṇī）を造る。

ここでは，定んで外内の二明の修習を重ねた心相続を持てる ācārya Anupamarakṣita は，所縁も分別もない真実（tattva）の教誡の修習によつて，吉祥 Khasarpaṇa に，12 年間を過ごされた。そこでは，勝れた証得を生じえず，惨めな気持であつた。眠気を催した彼に，金剛瑜伽女が教令を示した，「息子よ，Vikramapura に行け，そこで，汝に勝れた証得が生ずるであろう」と。そこで彼は，その教令を頭にしまい，彼の当時の弟子，Sādhuputra, mahāpaṇḍita Śrīdhara を伴つて，Vikramapura に赴かれた。そこでまた，ある月のみちかけの変り目の日の夜半に，すべてを投げ捨てた姿で，世尊から，現前に教誡を受けた，「息子よ，これは真実である」と。彼は，その教誡を聞くや否や，三昧に入定した。かの世尊も即座に消え去つた。そこで，この間に，夜が過ぎ，彼は三昧から立上つた。そして，吉祥を具えた師・大我性の彼は，その場所であらゆる苦行を行い，自分の証得を吉祥 Śrīdhara に教示した。吉祥の師にして最勝の慈悲を得ている彼は，あらゆる（智慧の）器を証得し，自己の証得を大軌範師 Bhāskaradeva に恵み与えた。それから，大軌範師・勝者師・Kali-yuga 期の一切智者 Dharmākaraśānti に説いた。過失のない慈悲等の，言葉に尽せぬ程の徳宝を持つこの師から，私・Raviśrī は，吉祥なる師の御足に縋り，真実をまさしく得た。以上が，師相続(guru-paraṃ-paryaṃ)である。

この様に，善良なる弟子の懇請に応じて，阿闍梨 Anupamarakṣita は，持金剛の位を得る因として，『Ṣaḍaṅgayoga』を造らんと楽われて，自己の守護神への讃歎の門により，『Ṣaḍaṅga-yoga』を説かれた……」

と述べ，Anupamarakṣita-Śrīdhara-Bhāskaradeva (-Dharmākaraśānti)[26]-Raviśrī の系譜を記している。『Kālacakra tantra』,『Vimalaprabhā』の成立，乃至それ以後の時代に活躍し，同時代の弟子の Śrīdhara が，1100 年を下らないと云われている[27]ことからすれば，彼の年代も 11 A. D. 後半に絞られてくる。従つて，『VS』についても，Nāro-pa と同名を名のる別人の，あるいは Nāro-pa に仮託して造られた註釈書であると考えられ，“Sñan-grags” に再考の余地が生ずる。

25）G. Grönbold, op. cit, S. 13. D. fol, 303a^4–b^5, P. fols' 342a^6–343a^1。

26）Dharmākaraśānti と Raviśrī との師弟関係には問題があるとされる（G. Grönbold, op. cit, S. 128。共に，“Abhayākaragupta の随求者である”（羽田野先生，Kāśmīra-mahāpaṇḍita “Śākyaśrībhadra” 674–3 頁）。

27）B. Bhattacharya, Sādhanamālā vol. II.（G. O. S. No. 41）pp. cxviii-cxix。